

明るい未来へ

岐阜市立岐阜清流中学校 3年

宮田 果典

「コロナ」

今年に入ってから、この言葉を耳にしない日はない。この「新型コロナウイルス」は、世界中の人々の心と体を脅かし、予想だにできなかった苦難が世界中に降りかかっている。

「明日から学校に登校できない。」

そう聞いたとき、信じることができずにいた。先生の声は聞こえているのに、理解することができずにいた。まるで、頭の中が渦をまいているようだった。様々な行事が中止や延期になった。友達や一年間過ごした学級との別れもあつという間で、あっけなく私の中学校2年生の生活が終わりを告げた。

自粛期間が始まった。学校も部活動も習い事もない。休み。休み。休み。緊急事態宣言が発令され、さらに休みは広がっていく。休業。閉店。閉鎖。外に出ても、どのお店もシャッターが閉まっている。

そんな中、私の誕生日が近づいてきた。以前からお祝いに家族で食事に行こうと話していたお店が休業になってしまった。とてもショックだった。私の誕生日は一年に一度しかない特別な日であるのに、こんなことになるなんて…。今までで一番悲しい誕生日になると思った。くやしくて、つらくて、泣きたくなった。同時に生活の全てがなくなって、どうすればよいのかと途方に暮れていた不安な気持ちもあふれ出し、大粒の涙となってこぼれた。この状況は、自分だけでなく、周りの人も同じだ。でも、自分のことしか考えることができなくなってしまった。

誕生日当日。

「パーン」「パーン」「パーン」という、クラッカーの音が鳴り響いた。

「お誕生日おめでとう！」

なんと、家族が家でパーティを開いてくれたのだ。家中が妹の折ってくれたたくさんの折り鶴で飾られていた。テーブルには、母が腕を振るって作ってくれた料理がたくさん並んでいた。私を喜ばせようとしてくれた家族の思いがとてもうれしくて、私は胸がいっぱいになった。涙が、私の頬を伝った。また泣いてしまった。私は泣いてばかりだ。でも、今度は温かい涙だった。おいしい料理を食べ、夢のような時を過ごすことができた。楽しみにしていたお店での誕生日会はできなかったけれど、十五年間生きてきて、一番家族とのつながりを強く感じるすることができた。私は幸せだ。この家に生まれて。今までで、一番思い出に残る誕生日になった。

コロナウイルスは世界中の人々を苦しめ、多くの尊い命を奪った。それにより、大きく変化した私たちの生活から学ぶこと、感じるものがたくさんあった。とりわけ、私たち子どもにとって大きく変わったことは、友達にも会えないことだ。毎日くり返されてきた学校生活は、突然切れた縄のように、ぶち切れてしまった。学校に行きたくてもいけないのだ。生活が一変した。

このことで、日本いや世界中に、学校に行きたくても行けない子が数えきれないほどいるという現実を目を向けることとなった。家庭、健康、事情はそれぞれだが、「学校に行きたい」という気持ちを胸に押しこめて、耐えている子が数多くいるのだ。恵まれている日常を大切に生きること、学校に行きたくても行けない子たちをこれからどのように支えていくかということを考えなくてはならない。そう気づかされた。そして、私に夢ができた。そういう子どもたちに、勉強を教えること、世界中の子どもたちに勉強の楽しさを届けることだ。

新型コロナウイルスは、世界中を混乱の渦にまきこんだが、恵まれ、全てが当たり前になっている私たちに、家族のありがたみや、かけがえのない日常について、立ち止まって、振り返る機会をくれた。気づかされたことは、一人一人違うが、それは、未来を生きる私たちにとって、大きな一歩になったのではないかな。一人一人の一歩が、やがて明るい未来へとつながっていくと思う。